

石田千 ISHIDA sen

つねに見送るひと

～鈴木清『流れの歌』復刻に寄せて



『流れの歌』より

汲むことを求め、等身大よりふくらませようときえする。掌中に得たいという欲求は、撮影の本来だから、当然の態度とも思う。

『流れの歌』のなかをたずねると、受身として置かれたレンズのまえに、ひとがあらわれた。もしくは、おぼろげとカメラをぶらさげるひとを見かね、迎え入れられていたように見える。

撮りたい、撮ろうという欲をつぶすことに労を費やし、被写体、撮影者、観賞者それぞれ、気やすくただよう生をさらしあう。じゃんけんのように自在、影踏みのように軽やかに、共有する写真というものが成立している。撮影者だけではなく、作品じたい、語り手ではなく聞き手になっていくのは、おおきな特色と思う。

旅芸人や、炭鉱夫の、身内にむけるような頬に触れる。彼らの目にうつった、鈴木清というひとを思う。

清潔ではない、しめつた場所。暗がりや舞台裏にひかれて、そのうしろにある素をさがして歩く。

おおきな石をひっくりかえし、あわてた虫がうごめくのを見たり、祭りや夜店のおじさんになつくような少年性はそのままだよ。許さうがないな、特別だよ。許さうにみえる。

ねじふせるような静かさ。自分しんを、ちいさな存在と思わせてくれるもの。カメラがどめきれないもの。そうして歳月と記憶を発見する。出生地から、各地の旅へ。活動の流れは、自然なことと思われる。

旅は、幼児とおなじように、未知と世界の広さをかかえさせてくれる。交流を待つあいだは、ちいさな背丈で見たような世にいられる。そのころぼそそで、獲得する。なものだったか、なにものになるのか。答えを、いまの道にゆだねていく。

朽ちるもの、すたれるもの、置きざりになるもの、流れるものたちと雨と土の匂いやしめりけを共有し、思い出そうとまぶたをどじるかわりに、カメラでへだてる。

写真家と被写体のあいだに立ち、じつと黙るカメラを、一升びんをかついだ女が見つける。女が笑いかけた瞬間、その場のすべての存在が定まる。電柱も雲もおなじように、その距離を確保しながら撮影されている。

いつも、だれかを見送るような目の包容力。ホームに立ち、走る電車に、みずからは乗らない。駅を出て家路にむかうこともない。たとえだれもいなくても、女の部屋でも、つねに見送るひととして、すうとした風のかかにいる。心細い不安定な場所に立ち、その空気につつまれているひとりとして撮影しようとする態度と、帰る場のないひとへの共感は、とどろ



『流れの歌』より

愛書狂

ひつつめ髪にメガネ、普段着はトレーナーと、超地味な女子大生を主人公にしたマンガ『野田ともしうします』(柘植文著)が抜群に面白い。第二巻では、彼女が突然、「太宰治の『津軽』って文庫本に注解が447個あるのをご存知ですか?」と言いつつ▼新潮文庫版の『津軽』(九五刷)の巻末にある「親切すぎる注解」を話題にし、「呉服店」が「和服の織物を扱う店」とあるのを「そんなの知ってるよー」とからかう。ギャグマンガとは思えない内容に仰天だ▼私が知らないかぎり、いち早く新潮文庫『津軽』「注解」に疑義を唱えたのは「週刊文春」連載エッセイ「お言葉ですが…」の高島俊男だ。「これは賤しきものなるぞ」と題して、「なんでもない語にまでかたはしから注をつける」愚を徹底批判している。しかも、ほとんどが「広辞苑」丸写しだとあきれられる(『広辞苑の神話』文春文庫に所収)▼高島の批判を受け、現在の注解は手直しされているが、私の所持する『津軽』は、「さるまた」男が用いる、腰やまたをおおう下着の短いももひき」という珍解説。昭和四十二年版を見ると注解はない。昭和人に「さるまた」は説明不要。それだけ昭和は遠くになったのだ▼文庫の注解で目覚ましい成果を挙げたのは、岩波文庫版『浮雲』。二〇〇四年の改版時に、校注の十川信介は六六四もの注を新たに付した。「題」を「したあご。ここでは生計。『おとがいを養う』で生計を立てるの意」とし、髪型や帽子などの風俗は図版で示す。明治という時代の可視化への挑戦で、ほれほれした。(野)

まれないものをとどめる無謀を、思い知っているからと思う。そのために、一冊として編む必要があったのかも知れない。記録と記憶を落ち葉のように堆積させ、見ておわりにならない、その場で完了しない写真の層が生まれた。その場しのぎの交流よりも、黙つたままの無知を選んだ。輪に入るより、気後れ丸腰を優先させる。撮りたいと思うほど、あとずさりして待つ。

『流れの歌』は、見るひとを写真のなかに招き入れる。撮影をした鈴木清は、もう亡くなっている。見るひとは生きていながら、写真のむこうに入っていない。レンズに問われるまま、好きなだけ語りかけてもいい。鈴木清とおなじように、歳月をまとい、ただつつまれ目をしていくこともできる。その自由が、みずみずしく、うれしい。被写体も、撮影者も、観賞者も、くまなく均しくうつされる。いつでも、訪ねあえる。

暗がりに、男の半身がうつっている。支度中の役者のように、顔を白く塗っている。笑うでも、怒るでもない。すこし眠たそうでもある。私自身と、題がある。こういうことしたいま、ふたたび目覚めることを知っている。たような顔をしている。

◆筆者 一九六八年福島県生まれ、東京育ち。二〇〇一年「大踏切書店のこと」で第一回古本小説大賞を受賞。著書に、『月と菓子パン』(新潮文庫)、『屋上がえり』(筑摩書房)、『きんぴらふねふね』(平凡社)、『店じまい』(白水社)など。

▼3面に『流れの歌』詳細

■鈴木清写真展
「百の階梯、千の来歴」
会場：東京国立近代美術館
会期：開催中
～十二月十九日まで

開くたびに、安堵とおそれにくつろぐ。生まれてからこれまでと、死んでいくこれから。そのあいだに身をひたし、手をつなぎ、いまに戻る。こういう目で、世界を見ていたことがある。その実感を、からだは覚えていた。つい最近生まれただけでも、きつとおなじように思い出す。なつかしきは、うつされた景色ではない。

画面を占める暗がりは、真夜中に目をさましてしまつたときの、ただひとりの世のはてだった。水面や光、しろい下着。はだけた浴衣のなかに入りこむ空気が、ひとの歳月と虚実をつつむ。いのちは、明暗のあいだを行きつ戻りつして漂っている。

差し出される写真は、そのときそのままのなかに、過去とこれからが織り込まれた羽衣のようで、たとえば、不安と安堵を漠然と受け入れている生に気づく。

このあたりまえを写真ににじませることは、ずいぶん難しい。過去と現在の同居ならば、むしろ言葉をつかうほうが便利と思う。

写真は、しばしば正直すぎる。饒舌であっても、だまっけていても、撮影者の存在がつねにたどり着く。意があふれる強い個や言葉で、

開くたびに、安堵とおそれにくつろぐ。生まれてからこれまでと、死んでいくこれから。そのあいだに身をひたし、手をつなぎ、いまに戻る。こういう目で、世界を見ていたことがある。その実感を、からだは覚えていた。つい最近生まれただけでも、きつとおなじように思い出す。なつかしきは、うつされた景色ではない。

画面を占める暗がりは、真夜中に目をさましてしまつたときの、ただひとりの世のはてだった。水面や光、しろい下着。はだけた浴衣のなかに入りこむ空気が、ひとの歳月と虚実をつつむ。いのちは、明暗のあいだを行きつ戻りつして漂っている。

差し出される写真は、そのときそのままのなかに、過去とこれからが織り込まれた羽衣のようで、たとえば、不安と安堵を漠然と受け入れている生に気づく。

このあたりまえを写真ににじませることは、ずいぶん難しい。過去と現在の同居ならば、むしろ言葉をつかうほうが便利と思う。

意識に直接与えられているものについての試論

【新訳ベルクソン全集1】
アンリ・ベルクソン「著」

哲学者であるとともに科学者、そして文人でもある知の巨人——ベルクソンの統一的全体像がわかる、本邦初の個人完訳！ 全七巻十別巻の口火を切るのは『時間と自由』として有名な論考。

本邦初の個人完訳！

ルクソン哲学の出発点。感覚をはじめとするさまざまな意識状態を、どのように考えるべきか？ はたして、「生きている」とはどういうことか？
言葉や空間を媒介させずに (im-medial)、意識に直接 (im-medial) と与えられるがままに現象を把握すること。これすなわち「持続」であり「時間」であるという直観をもとに、「自由」とは何かという問題を論じてゆく。

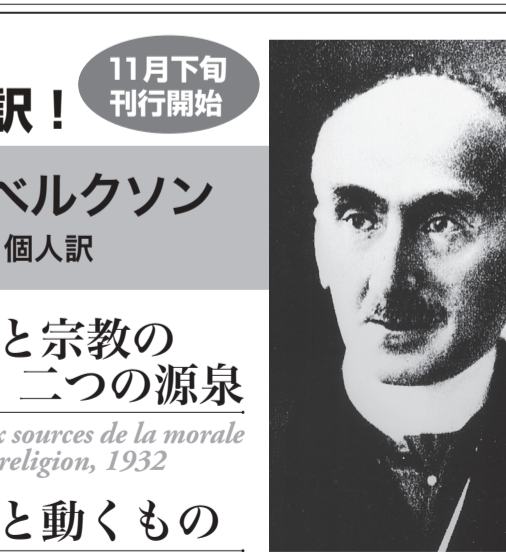
加賀野井秀一氏による解説、安藤礼二氏によるエッセイ、しりあがり寿氏による漫画をおさめた月報つき。
◇竹内信夫訳 四六判 二四〇頁 定価二七三〇円 (本体二六〇〇円) 11月下旬刊

ナチに抵抗した作家——ひとたびネットで検索すれば、ケストナーにはこんな言葉が冠されている。一般的な認識もほぼ同じだろう。だが果たしてそうか。実際の彼はどうかだったのか。残念ながら、公刊された母親との往復書簡は伴侶ルイーズロツテにより都合よく取捨選択され、第二次大戦末期を描く終戦日記『四五年を銘記せよ』は戦後の状況に合わせて作家自身の手により訂正・加筆され、真実を伝えるものとはな

エーリヒ・ケストナー 謎を秘めた啓蒙家の生涯

矛盾をはらんだ国民作家の実像
真のケストナー像を求めて著者は断簡零墨に至る膨大な一次資料に直接当たり、これまで世に定着していた固定観念や思い込みを容赦なく破砕し、この矛盾に満ち謎を秘めた作家

の实像に迫ってゆく。こうして、第三帝国下の彼はどこにいて何をし、何に関心を抱き誰と交際していたか、その〈抵抗〉の真実が具体的に明らかされる。〈出生〉の秘密の真実をさぐる冒頭から、母親との異常なまでの関係、複数の恋人との同時交際による〈火宅の人〉の苦悩、そしてアルコールに没する晩年まで、章を追うごとに読者は、大国民作家の綱渡り人生と作家であることの悲哀を知り瞳目することになる。ケストナー伝の決定版。
◇藤川芳朗訳 A5判 五八〇頁 定価六八二五円 (本体六五〇〇円)



Henri Bergson
人名・書名索引 用語解説集
別巻1

ビザンツ 驚くべき中世帝国



ビザンツ。四世紀に東西分裂したローマ帝国の東半分が始まり、十五世紀にオスマン・トルコに征服されるまで、千百年あまりにわたって東地中海に栄えた帝国。世界史のなかで重要な位置を占める国

家でありながら、これまで日本では今ひとつなじみが薄かった。本書では、「ラヴェンナ・モザイク」「ギリシア正教」「聖像破壊運動と聖像崇敬」「ビザンツの経済」「宦官」など、政治・宗教・文化・経済などに関する二十八のテーマを時代順にならべ、西欧やイスラームとの関係とともに、立体的に解説する。七百年にわたって地中海貿易で活躍したノミスマ金貨に彫られた凶像の変化や、「書評の発明者」とい

われる九世紀の文人など、興味深い情報も多い。ビザンツの文化は当時のヨーロッパ諸国の羨望的であった反面、ヴォルテールやギボンなど、後世の思想家・歴史家から激しい中傷を受けてきた。その偏見についても、著者は原因を考察している。

最近のビザンツ史研究の動向を反映し、西洋史ファンへの期待にも応える、お薦めの一冊。
◇井上浩一監訳 足立広明、中谷功治、根津由喜夫、高田良太訳 四六判 五〇〇頁 十口絵八頁 定価四六二〇円 (本体四四〇〇円)

一九〇〇年の「東のパリ」に、ようこそ！ ドナウ河畔で都市的発展と文化的成熟の両面で黄金時代を迎えていた世紀末メトロポリス——オーストリア・ハンガリー帝国のもうひとつの首都ブダペストについて、いきいきと明快に描いてゆく名著の新装版。

統計によれば、一八六七年から一九一四年にかけてブダペストの人口は三倍に、銀行の数は二から一六〇に増大し、一八九四年にはヨーロッパ大

陸初の地下鉄さえ敷設されていた(ちなみにパリの地下鉄開通は一九〇〇年。市街には六〇〇店をこすカフェが軒を並べ、ウィーンと同じく芸術家やジャーナリストたちはそこにたむろして談論風発し、原稿を書いた。

著者は、一九二四年のブダペスト生まれで、都市史や、両大戦期や冷戦時代の欧米史を専門とする、アメリカ在住の歴史家。マジャル文化へとの愛のある眼差しをそそぐ。
◇早稲田みか訳 四六判 三四四頁 定価三七八〇円 (本体三六〇〇円)

輝ける地中海帝国の歴史

分裂したローマ帝国の東半分が始まり、十五世紀にオスマン・トルコに征服されるまで、千百年あまりにわたって東地中海に栄えた帝国。世界史のなかで重要な位置を占める国

を跡づけてゆく。またクリスマスツリーの成立には、十六世紀の宗教戦争や対ナポレオン戦争が関わっているという。ここにはある。

巻頭のカラー図版を始め、本文中にも貴重な図版が多数掲げられ、「クリスマス市」や「料理・お菓子」の章などにもじつに楽しく読める。クリスマスは勿論、家族で楽しくクリスマスを祝いたい人々のための、各紙誌絶賛の必読書。北原照久さん推薦！
◇四六判 一九八頁十カラー 八頁 定価二二〇〇円 (本体二〇〇〇円)

1900年の「東のパリ」

東欧の社会史をいろいろ、文学・音楽・絵画・建築……当時の「文化人」のみならず階級構造や政治経済についても詳らかにしてゆく本書は、都市論のケーススタディのためにも貴重だ。



ら修業時代、そして師匠の死を乗り越え一人前の職人になるまでの一種の成長物語でもあり、失敗や苦勞を含め、徒弟時代の興味深いエピソードがユーモアを交えて語られる。本が大量生産されては捨てられる時代に、貴重な古書を手で丹念に修復するという営みは、決して単なるノスタルジアではない。書物という知的財産を、数十年、数百年にわたって保存し、次代に伝えることの意味ははかりしれないほど大きい。

◇市川恵里訳 四六判 二二〇頁 定価二九四〇円 (本体二八〇〇円)

クリスマス文化史

若林ひとみ「著」
師走ともなれば街角にはサンタクロースが立ち、ツリーは眩いばかりに輝く。でも、こんな見慣れた風景の歴史的背景や来歴を、私たちはどれだけ知っているのだろうか。例えば丸々と太ったニコニコ顔のサンタさんは、今からおよそ一四〇年前アメリカの政治風刺画の父とされるT・ナストによって初めて描かれたもので、それ以前はわれらがサンタさんは何ともシヨボイのだ。怖い顔してやせかけて

ツリーはなぜ飾るの？

いたり、〈閻魔帳〉をもった司祭服姿もあれば、頭にヒイラギの冠をのせ夜道を歩くサンタさんもある。こんな姿を紹介しながら著者は、三世紀の聖ニコラウスの事跡に始まり、スペインに対するオランダ独立戦争を経て現代に至る歴史

を跡づけてゆく。またクリスマスツリーの成立には、十六世紀の宗教戦争や対ナポレオン戦争が関わっているという。ここにはある。

巻頭のカラー図版を始め、本文中にも貴重な図版が多数掲げられ、「クリスマス市」や「料理・お菓子」の章などにもじつに楽しく読める。クリスマスは勿論、家族で楽しくクリスマスを祝いたい人々のための、各紙誌絶賛の必読書。北原照久さん推薦！
◇四六判 一九八頁十カラー 八頁 定価二二〇〇円 (本体二〇〇〇円)

古書修復の愉しみ

書籍修復、それも西洋の古い稀覯本という一般には知られざる世界について、著者は具体的な技術を含め、詳しく面白く、いきいきと描き出す。修復作業の現場から始まる書き出しから、読者は目をみはる思いで作業工程のひとつひとつをたどってゆくことになる。壊れた本の直し方について、職人の命である道具——しばしば日本の伝統的な工具や手漉き和紙である——について、著者は情熱をこめて語る。

本書は、アメリカの一流製本工芸・書籍修復家ウィリアム・アンソニーに女性としてはじめて弟子入りした著者が、書籍修復家として成長する過程を自伝的に綴った回想録である。

◇市川恵里訳 四六判 二二〇頁 定価二九四〇円 (本体二八〇〇円)

本書はまた師との出会いが

月報付 (第1巻月報 エッセイ：安藤礼二 解説：加賀野井秀一 連載絵巻：しりあがり寿) 四六判 240頁 定価2730円 (本体2600円)

哲学者であるとともに文学者・科学者でもある知の巨人——ベルクソンの統一的全体像がわかる、本邦初の個人完訳！

新訳ベルクソン全集 全7巻・別巻1

アンリ・ベルクソン 竹内信夫●個人訳

- 意識に直接与えられているものについての試論
Essai sur les données immédiates de la conscience, 1889
『時間と自由』として有名な論考を改題・新訳
- 物質と記憶
Matière et mémoire, 1896
- 笑い
Le rire, 1900
- 創造的進化
L'évolution créatrice, 1907
- 精神のエネルギー
L'énergie spirituelle, 1919
- 道德と宗教の二つの源泉
Les deux sources de la morale et de la religion, 1932
- 思考と動くもの
La pensée et le mouvant, 1934

以後続刊

第1回配本・11月下旬刊

各巻 四六判/上製/月報付

「エクス・リブリス」第11回配本
オルガ・トカルチュク「作」

歴史学、ポーランドは国境線が不安定に揺れ動いてきた国である。現在はロシア、ドイツ、チェコなどと接しているが、国境近くの町や村は、過去のある時点ではまったく別の名前と呼ばれていたのだ。

本作の舞台は、ポーランドとチェコの国境地帯にある小さな町ノヴァ・ルダ。かつてはドイツ領でノイロドと呼ばれたこの土地に夫と移り住んだ語り手は、隣人たちの交際を

物語る土地の記憶

通じてその地方の来歴に触れる。しばしば形而上的な空想にふけりながら、日々の覚書、回想、夢、会話、古い、聖人伝、宇宙天体論、料理のレシピなどの数々が綴られていく。
「フラムリナ、あるいは野生のキノキタケ」ご近所の一人は、キノコの季節になるときまづて家を訪ねてくる。アウシュヴィッツ（オシフェンチム）で買った食油の話と、エフキタケのゴロッケの作り方が披露される。
「ペーター・ディーター」ドイツ人ペーターは、生まれ育った家を見るため、妻と国境を越



ISBN978-4-560-08093-2

える。登山の途中、心臓発作を起こして息絶えた彼の片足はチェコ側に、もう片方の足はポーランド側にあった。
……これら百十一もの挿話によって、ある土地をめぐる二つの幻想的な物語世界が立ち上がる。現代ポーランド文学の旗手による傑作長編。◇小椋彩訳 四六判 三八〇頁 定価二七三〇円（本体二六〇〇円）

少女

アンヌ・ヴィアゼムスキー「作」



ISBN978-4-560-08096-2

「私はこの映画に出たいと望んでいた。それまで一度も何かをこんなふうに望んだことはなかった。まるで私の全人生がそこにかかっているような気持ちになって、全身全霊を込めて望んでいた（本文より）」

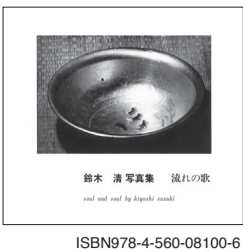
小説か？ 実録か？

十七歳の女子高生アンヌは、友人に連れられて、ある老齢の映画監督の自宅を訪れる。それが、次回作のオーディションであることも、またこの日を機に平凡だった自分の人生が劇的に変化していくことも知らずに。その監督の名は、ロベール・ブレッソン――

著者は、ノーベル文学賞作家フランソワ・モリアックの孫娘。映画の主演に大抜擢され、六六年に作品が公開されるや一夜にしてスターダムに躍り出た。翌年ゴダールの「中

流れの歌

鈴木清「著」



ISBN978-4-560-08100-6

ぞ知る写真家が、炭鉱夫、女工、プロレスラー、旅芸人など詩情溢れる昭和の原風景を追った、処女作にして代表作『流れの歌』（当時は自費出版・二五〇〇部限定）が、約四十年の時を経て復刻される。

没後十年。この秋、写真家の軌跡を統括的に紹介する初の回顧展「鈴木清写真展 百の波が訪れよう」としている。◇A4変型 布上製 収録作品八二点 九二頁 FMSクリン方式二色刷 特別小冊子付（解説・飯沢耕太郎）アートディレクション・鈴木一誌 定価五〇四〇円（本体四八〇〇円）

幻の写真集、復刻！



作家を「存知だろっか。夢や記憶、旅や文学などをモチーフとした、緻密で重層的な作品世界を織り成す独特の写真集作りに、今日国際的な注目が集まり、早すぎた偉才。その知る人

「エクス・リブリスクラシックス」
エミール・ゾラ「作」

政治は腐敗、無政府主義やテロが横行し、ブルジョワが隆盛を極め、労働者は貧困に喘ぐ十九世紀末のパリ。その悪徳と矛盾の町を見下ろすように、モンマルトルの丘ではサクレ・クール寺院の建設が急ピッチで進められている。そこに、信仰を失い魂を彷徨わせる神父ピエールがいた。貧民救済に奔走するある日、彼は男爵邸での爆発事故を目撃する。その現場にはなぜか、化学者である彼の

文豪の食卓

宮本徳蔵「著」

相撲、歌舞伎、文学など幅広い分野での碩学として知られる著者による、知的興味あふれる「美味礼賛」。東大在学中の師弟交友から現在まで、食にまつわる多くのエピソードが開陳されている。

知的興味あふれる「美味礼賛」

かつて著者は文豪の集まる荻窪近辺で、井伏鱒二郎近くに住んでいたことがある。敬愛しながらもついに訪なうことになった著者だが、その井伏の微に入り細をうがった饅談義を紹介するくだりなどは、著者なら



ISBN978-4-560-09025-5

知られざる名作、待望の新訳！

兄ギヨームの姿があった。『ナナ』『居酒屋』など、日本では自然主義文学作家として知られるゾラ（1840-1902）だが、ジャーナリストであり鋭い

奇想の美術館

アルベルト・マンガエル「著」

『図書館 愛書家の楽園』で、書物と人間の過去・現在・未来を透視した著者が、美術鑑賞における新たな可能性をひらく名作「絵画 写真、彫刻、建築など独自の視点で選ばれた作品群を、既存の図像学や



美術鑑賞の新たな可能性

奇想の美術館
アルベルト・マンガエル「著」
『図書館 愛書家の楽園』で、書物と人間の過去・現在・未来を透視した著者が、美術鑑賞における新たな可能性をひらく名作「絵画 写真、彫刻、建築など独自の視点で選ばれた作品群を、既存の図像学や

イメージを読み解く12章

美術批評にとられず、自由奔放に読み解く魅惑の12章。紀元前から二十世紀まで、

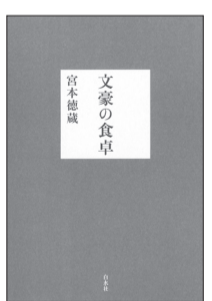
欧米を中心にさまざまな作品が取り上げられる。日常のなかに聖なる場面を描いた十五世紀ネーデルラントの画家ロベール・カンピン。毛むくじらの顔の少女を愛らしく描いた十六世紀イタリアの画家ラヴィニア・フォンターナ。「ブラジルのミケランジェロ」とも評される天才彫刻家アレシジャディーニ。フランス革命期に理想都市を思い描いた建築家ルドゥー。二十世

迷える中年の指針となる一冊

小生の筆名は「犬」（いぬ）です。これはもちろん犬好きというところもありますが、最新刊『人中年に到る』を上梓された、四方田犬彦氏への思いを込めたものでもありません。十数年前、『電影風雲』という大部の「東アジア映画監督論」の編集を担当したのがきっかけで、四方田氏の飾らない人柄と博覧強記の才能に魅せられたのです。

昨年、四方田氏は大病を患いましたが、無事に治癒しました。以来、自らの来し方を振り返り、それを自由な文体で書いてみたという思いが募りました。専門の映画や文学の批評ではなく、ほかならぬ中年の「わたし」につ

「職業」「旅」「世代」「国家」「友情」「無為」「老い」「死」などを主題に、全十八章を書き下ろした、四方田版「エッセイ」を人生の薄暮に迷える足元にはんどの明かりを灯してくれる、好個の書。



ISBN978-4-560-08097-9

編集ごぼれ話

「今回のピックアップ本」
四方田犬彦著
『人、中年に到る』

「今年二月、四方田氏はヶ月ほどオーストリア出張講義に出かける機会がありました。雪に閉ざされた宿に籠もり、書物や資料を参照せずに、一気に本書を書き下ろしたのです。」

（担当編集者・犬）

話題の本

朝日新聞・毎日新聞に書評掲載！

熊 人類との「共存」の歴史

ベルント・ブルナー著 伊達淳訳
熊はなぜ人に畏られ、愛され、狩猟の対象とされてきたのか？有史以来、宗教、科学、文学等の分野で特別な位置を占めてきた熊と人との関係を歴史的に考察する。 ●定価 2520円（税込）



「武田鉄矢・今朝の三枚おろし」(文化放送他)で紹介！

哲学者とオオカミ 愛・死・幸福についてのレッスン

マーク・ローランズ著 今泉みね子訳
哲学者がオオカミと共に生活しその死を看取るまでの驚異の報告。朝日新聞、NHK 週刊ブクレビュー等々で絶賛の、「人間存在を揺さぶる」話題作！ ●定価 2520円（税込）



【展覧会情報】レンパッハハウス美術館所蔵「カンディンスキーと青騎士」展
会場：三菱一号館美術館（東京・丸の内） 会期：2010年11月23日～2011年2月6日

●関連書籍 ●『青騎士』
カンディンスキー、フランツ・マルク共編 岡田素之、相澤正己訳
芸術の新約聖書とも呼ばれ 20 世紀芸術に決定的な影響を与えた、美術理論文献の白眉！ 図版 155 枚、折込み楽譜 2 葉 4 頁。定価 4830円（税込）



「やさしくはじめる韓国語」 ちよん・ひょんしる [著]

暮らしの中のことばを通して学ぶ。言葉と文化は表裏一体

本書は全体で4章と付録から構成されています。カナ表記で自然な会話表現からスタートし、文字遊びの感覚でハンガルのしくみを取り上げ、そして決まり文句を学びながら発音規則を身につけます。その上で、文法規則に触れながら、一歩進んだ会話表現を学びます。

言葉を知ること、すなわち文化を知ること。言葉の背景についての日韓比較文化コラムを豊富に設けました。楽しみながら、理解を深めます。付録では、家族、日課、料理に関する文章によって文化を読み解きます。最後はチヂミやキムチの作り方も取り上げました。

◇A5判 191頁 定価2310円(本体2200円)

「フィンランド語文法ハンドブック」 吉田欣吾 [著]

フィンランド語の森を歩くための最適ガイド

「日本から一番近いヨーロッパ」で話されているフィンランド語には、26種類もある格変化や母音の相性をはじめ、面白いくみがいっぱいあります。たとえば、自動車と牛乳を表わすことばは別のグループに分類されます。でも、自動車を何台も持っているときには、牛乳と同じグループと見なされるのです。なぜでしょうか。英語だけではわからないこんなに魅力的なフィンランド語の世界を、本書をガイドブックにじっくりと歩いてみませんか。待望久しい本格的な文法書。

◇A5判 340頁 定価3990円(本体3800円) 11月下旬刊

「中級チェコ語文法」 金指久美子 [著]

日本語で読める最も詳しいチェコ語の文法書

初級文法を終えて実際のチェコ語に触れてみると、どうもピンとこないことが出てきます。ここでこういう語形変化をしているけれど、辞書を引いてもなぜだかよく分からない……。本書は、そのような「辞書では解決しにくい文法事項」をじっくり解説しました。各項目は見開き2ページで完結。最初から読み進めることも、知りたいところだけを調べることが可能です。日本語で読める最も詳しいチェコ語の文法書です。巻末に語形変化表・用語索引・語彙集つき。

◇A5判 254頁 定価3990円(本体3800円) 11月下旬刊

やさしくはじめる韓国語

暮らしの中のことばを通して学ぶ。言葉と文化は表裏一体

ISBN978-4-560-08545-5

リレーエッセイ

ことば紀行

第4回 立岩礼子

スペイン語

【主な使用地域】スペイン、ラテンアメリカ(ブラジルを除く)
【話者数】およそ3億5千万人
【使用文字】アルファベット26文字に加え、スペイン語固有の文字としてÑ, ñを使う
【あいさつしてみよう】¡Hola! オラ! (こんにちは)

壁にメニューが書かれたメキシコの食堂前で

野崎 敬著 ISBN978-4-560-72119-3

小説を読む喜びにまぎれるものがそれほどあるとは思えない。そう確信する著者が、十九世紀の極めつきの名作から二十世紀の傑作まで、小説の読みどころ、味わい方を陶然と語った一冊。スタンダー、バルザックなどの十九世紀小説にはじまり、ネルヴァル、ブルースト、ブルトンをいわば「ちよんつがい」として、ボリス・ヴィアンからウエルベックまで、二十世紀の小説世界へ読者を誘う。批評的言説に目配りしつつも、そこに綴られているのは、すぐれた小説に関する論文がどれほど出ようが、それらすべての可能性を一冊のうちに秘めているのが小説である」という、文学への感謝と賛美の念である。

Uブックス化に際し、今世紀に入っているフランス小説について考察する一章「Uブックス版のための(長めの)あとがき」を併せて収録!

◇新書判 二八八頁 定価二六五〇円(本体二三〇〇円) 11月下旬刊

Q951 「ナポレオン三世」 ティエリー・ランツ [著]

ISBN978-4-560-09617-7

ナポレオン三世は、ナポレオン一世の弟イグノー、ナポレオン一世の妻ジョセフィーヌの連れ子オルタンスとのあいだに生まれた。フランス人は、このナポレオン三世に対して複雑な感情を抱いている。強引な手法で皇帝までのぼりつめ、フランスを「帝国」に逆行させ、十八年という長期にわたって君臨しながら、普仏戦争でビスマルクに敗北し、捕虜になったという屈辱的な事実があるからだ。とはいえ、おりしも産業革命期のフランスに、貿易自由化、鉄道網の整備、近代銀行制度など、経済発展をもたらす政策を次々と打ち出したのも、オスマンを起用してパリの都市改造事業をすすめたのも、彼だった。本書は、波乱に満ちた生涯をたどり、その政策・理念に光をあてている。

◇幸田礼雅訳 新書判 一五六頁 定価一〇三〇円(本体一〇五〇円) 11月中旬刊

Q952 「イタリア・ルネサンス絵画」 ジャン・リュデル [著]

ISBN978-4-560-09624-4

イタリア・ルネサンス美術は、単純で単純な発展過程をたどったわけではなかった。また、必ずしもレオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロのような突出した個性たちの独壇場だったわけでもない。そこでは、新しい社会・宗教的状況、都市や地域によって大きく異なるイタリア文化の多極的構造、北方絵画の影響、ほとんど時代的に並行する国際ゴシック様式との相関関係、新プラトン主義に代表される人文主義思想の影響など、実に複雑な要因が関わっている。本書は、このような視点から、絡み合った糸を解きほぐすように整理した解説書である。図版多数収録。

◇木村三郎、金山弘昌監修 望月典子、安室可奈子、田中麻野、一瀬あゆみ訳 新書判 一九〇頁+カラー一頁 定価一〇三〇円(本体一〇五〇円) 11月中旬刊

本紙をご購読いただいているみなさまに大切なお知らせ

「出版ダイジェスト・白水社の本棚」は、3ヶ月に一度の刊行に変わります。

いつもご愛読いただき、誠にありがとうございます。これまで隔月(1・3・5・7・9・11月)刊でお届けしてまいりました本紙「出版ダイジェスト・白水社の本棚」ですが、2011年4月より、3ヶ月に一度(1・4・7・10月)の刊行に変わります。次号2011年1月号までは従来どおりの刊行、3月は刊行がなく、4月号より3ヶ月に一度の刊行となります。4月号からは、紙面を増ページ・リニューアルし、ますます充実した内容をお届けしていく予定です。これからも変わらぬご愛読、心よりお願い申し上げます。(詳細につきましては、次号でお知らせいたします。)

「マンガIIおやつ」説を唱えた手塚治虫にならって、「小説IIオカズ」説というのを考えた。難解そうな専門書でも、慣れてしまえば小説よりも早く読めるものだ。肌合合わない小説はもの数頁でビクリとも動かなくなってしまう。嫌いな作家の文章であれば、いかにお母さんが原型をとどめないほどに調理して夕食にまぎれこませ、

本人がそれと知らぬまま食したとしてもジンマシンが出るであろう。好き嫌いはいけません? まあ、悪戦苦闘の末に読了したら猛烈な快感が襲ってきた、なんてこともあることはあるけどね。実を言えば、「マンガIIおやつ」説は七〇年頃のPTAによるマンガ焚書運動をかわすための方便であった。友人が熱心に薦めてくれた小説を未だ読めずにいることの、これは言い訳にもなりませんか。(目)

「queso amarillo (=スライスチーズ)をください」と注文したら、「ここにあるqueso (=チーズ)はみ〜んな amarillo (=黄色い)でしょ!」と相手にされなかった。食いつばぐれはごめん、と気を取り直して説明すると、「それはqueso sandwich (=サンドイッチ用チーズ)と言うのよ。簡単でしょ」と店員に大笑いされた、と。

同じ言葉を話すスペインで、まさか言葉の壁に突き当たるとは夢にも思わなかったらしい。慰めようもなかった。私は「Ni modo (=仕方がない)」とだけ言った。メキシコ人はよく使うが、スペインで聞かない言い回しだ。一息ついて彼は言った。「変なスペイン語を話してるのはスペイン人じゃないか!」

スペイン語、国変われば...

留学生活を始めるにあたって掃除道具を揃えるべく「jerga (=モップ)」を買いに行くと、そんなものはないと、とりあってくれない。ジュスチャまじりに説明すると、スペインでは「fregona」と言うことがわかったのだが、店の人に「正しいスペイン語を覚えないとね」と言われた。その足でチーズを買いに行くと

(京都外国語大学准教授)